一 ――――――――――――

一 ――――――――――――（中略）

〆　拾八口

右者罪人十右エ門家屋敷・諸道具闕所おおせつけられ、見分のため躙り越し吟味仕り候ところ、書面の通り相違御座無く候。七も右諸道具の義は、内所年寄・地目付どもへ預けおき申し候。此段申上げ候　以上

御徒士目付　下川勝左エ門　印
小頭　山田作兵衛　印

（おわり）

使りの中から

地震と高山海岸のこと

蒲江町竹野浦河内　吉田勝一老より

（上略）――昨年は先生の御尽力で所史ができ、町民も皆感謝しています。今後は何時々々までも所史は保存され役立つことと思います。

現在の蒲江町高山・元禄海岸のことで、書いて欲しかったことがありました。所史には昔の地震のことは書いてありますが、その時に蒲江の「ぼっぽ山」の約四分の一位が海にくずれこん、その山の土が高山元禄の新しい海岸をつくったといいます。

現在の新高敷地付近までがそれまでは一面の海で、蒲江行きの通路は海岸の上の山の中を通っていて、その道は現在もはっきり残っています。

高山海岸現在のすな地は全部海で、それが百五十年と二百年もかかって追々出来た土地だ　と私は祖母たちからも聞いています。

地震によって自然の地形が変ったこと、他ではあまり例のないことで、蒲江所史に書き残したかったと、思うまま書いて見ました。

（下略）

編集者いう――惜しいことでした。宝永四年（約二六〇年前）か、でなければ安政元年（百二十四年前）の地震でしょうか。今度蒲江に出かけたら、現地をとくと見ましょう。（吉田氏氏八十二歳の高齢者）

探訪記録

郷土碑文巡り（一）

柏江　野々下留蔵の碑

会員　山本　保

佐伯市柏江区、江国寺（禅宗）の境内、左手一段高いところに、次のような「野々下留蔵記念碑」が作んでいます。

（注）原文のままであるが、読者の便を考えて句読点を加え、且つ文意を汲んで段落を設けたことをお断りしておきます。

記念碑の様式はおおよそスケッチのようです。

〈碑面ノ文字〉

昭和二十年六月二十九日、米国ノ飛行機隊司令部ハ現在北九州市門司区ヲ攻撃シ、至ル所ニ猛威ヲ逞シウシ、明治屋支店モ亦烈火ノ襲フ所

（次ページニツヅク）

（篆額）

野々下留蔵君の碑
（柏江　江国寺境内）